

夏休みも学びです

小学校からの経験の中で、今年は初めて

七月末まで一学期です。学校に来るのが長くなることに生徒諸君はどんな反応を示すのかと気にしていました。が、ごくごく普通に登校し、ごくごく普通に授業を受け、ごくごく普通に下校しています。学校がそれだけ日常になっているのでしょうね。



もしかすると、長くなつた一学期よりも、八月二十四日まで三週間プラス三日で終わる夏休みの短さを強く感じるのかもしれない。

いずれにせよ、夏休みは学校を離れ、ご家庭や地域が教育を担う大切な期間となります。コロナ対応を心がけながらの生活となり例年と違う夏休みとなりますが、それでも教科学習や課外活動では学べないことに会おうよい機会です。

アルバイトの時間、ボランティアに参加する時間、親戚と話をする時間、家事を手伝う時間、ログインした先でパーティの仲間と戦う時間、一人読書をする時間。

漫然と過ごしては学びはありません。ご家庭でも地域においても、「何か気づいたことある?」「どう思った?」「どう考え

る?」と聞いてください。ほんの一瞬でも出来事を振り返り考えることが大切なのです。問いかけが大事です。(答えの善し悪しは不問にしましょう。)

七夕飾り十七音

本校とくぼた校の交流スペースに笹を飾り、両校生それぞれが短冊に願い事を書きました。



五七五・十七音
(俳句ではありません)で書かれた短冊から校長賞を選ぶというので、ここで発表したいと思います。

一席(校長賞)

ひぐらしの ささやき告げる 新学期

(評)八月下旬、初秋の夕暮れ、蝸が静かに鳴くのが聞こえ、同時に夏休みの終わりを深く感じる穏やかな上五・中七に対し、下五で「新学期」という朝の元気な登校風景を連想させる言葉を配置し、夏休みを惜しみつつ、新学期を期待する若い作者の二面の心を巧みに描き出している。

二席

ほしの砂 さぶんと聞こえ 海の声

(評)誰かの土産なのか、小瓶に入った星の砂。いくら小瓶を振ってもさらさらとかすかな音しかしないはずなのに、作者の若い感受性は、小瓶の向こうに広がる白い砂浜と、大きく打ち寄せる波の音を聞く。コロナなのか忙しいのか、なかなか行けない海への憧れを巧みに描き出している。中七「聞こえ」下五

「声」と聴覚が続くので一考あるとさらによい。

三席

炎天の 忙しく響く 蟬時雨

(評) 盛夏、アルバイトに向かうのか、直射日光にさらされ、噴き出す汗をぬぐいながら歩く作者。涼を求め、道途中の森に入ったとたん、大音量の蟬の声に包まれ、そこでも真夏を感じる様子が描き出されている。中七「忙しく」で一呼吸おいて読むとその様子がよくわかる。蟬時雨はもともと大音量なので、中七「響く」に一考あるとさらによい。

気になる句その一

早くこい 結婚できる その日まで

(評) 愛や恋の感情をテーマにする句が多い中で異色。結婚できるその日を早く来いと待ち望みながら、「その日まで」と「まで」とつけて下五を締める。その日「まで」何か別にしたいことあるの？ 気になる。

気になる句その二

袋がね やぶけそうだな ○○○くん

(評) ○○○には友人(男性)の名前が入る。なんとすることはない日常の一コマ、友人の持つ袋が破けそうになってる風景。いや、破けそうなのだから「くだな」なんてのんきに構えてないで、早くなんとかしたほうがいいよ。その後が気になる。

本校生の優れた感性の一端を紹介いたしました。

連載小説 自動ドア 第二回

仙田ノモ

小説「鏡」の主人公は、幽霊も見えないし、予知のような特別な力もないっていったね。私もそうだよ。小説の主人公と同じ、幽霊も見えないし、特別な能力もない。君たち大多数と同じ、普通の人間さ。

だから、この体験は忘れられないんだ。後にも先にもこんな経験は験したことがないからね。

教頭の仕事って言うのは、君たちは知らないだろうけど、結構忙しいんだよ。昼間、君たちが学校にいる時間帯は、外からのいろいろな問い合わせの電話や、お客さんの対応があったり、先生方の授業を見学したりするんだ。君たちが帰った後は、会議とかがあって、他の先生方といろいろな話し合いをする。



だから、職員室の教頭席に座っているいろいろな書類を見たり、パソコンで書類をつくったりするのは夜になっちゃうんだ。は夜になっちゃうんだ。単身赴任だったし、アパートに帰ってもテレビもなかったから、結構ゆっくりに仕事してた。だいたい帰るのは夜の十時ぐらいになってたよ。さすがに、遅くまで仕事で残ってる先生も九時ぐらいには帰ってしまう。夜の九時から十時までは一人で学校にいることが多かったよ。

あの日も、いつもと同じ一人の夜だった。ちょうど、梅雨の終わり頃だったかな。おしおししていたのを覚えてるよ。いつものように最後の先生が「帰ります」って九時頃挨拶に来て、静かな職員室にカエルの声だけが聞こえていた。

私は、次の日までに仕上げなければならぬ報告書があって、パソコンに向かって一所懸命カチャカチャカチャキーボードをたたいてた。調子よく書いていたんだけど、ちょうど九時半ぐらいだったかな、書く内容がうまく表現できなくて、ちょうど手を休めてどう書こうか考えなきゃいけないことになった。静かな校舎にカエルの声、怖いことなんかちっともなかったよ。(続く)

※「校長のつぶやき」は紙面の都合で今号はお休みします。

(本紙中のイラストは「いらねとや」WEBよりお借りしています。)